

美術

題材「美術は誰のためのものか」3年

全員が対話に参加できる問い合わせ

「ゲルニカ」に涙は必要か

制作途中に描かれていた赤色の涙が、最終的には消されていることについて、涙が描かれている場合と涙がない場合の印象を比較して考える。この問い合わせは、「なぜピカソが涙を描かなかったのか」を間接的に聞いていている。生徒は「涙がある方がよい」「ない方がよい」のいずれかの立場を取ることができる。それを追究する中で次のような理由が検討される。

- ①涙が描かれると悲しみが伝わってくる
- ②涙を描かないことで悲しみ以外の感情が伝わってくる
- ③涙を描くと見る者の視線が涙に集中する

どちらがよいのかを検討するためには、涙がある画面とない画面を比較してどのような違いを感じ取ったかを述べ合ったり、制作過程を見返して作者の思いやねらいを探ったりすることが必要になる。

単元構成

時間	◆学習内容と問い合わせ (○) は全員が対話に参加できる問い合わせ、(☆) は学びをさらに深める問い合わせ
1	◆ピカソの「ゲルニカ」を見て、何が起こっている様子か、そう感じる理由を述べ合う。 どのような出来事が起こっているだろうか
2	◆「ゲルニカ」の色彩の効果について感じ取り、ピカソが何を表そうとしたか考える。 ピカソの他のカラフルな作品と比較し、印象の違いを感じ取る。 完成までに作品が変容していることを知り、その意味を考える。 「ゲルニカ」に涙は必要か (○) 「ゲルニカ」の一輪の花は何を表しているか (☆)
3	◆岡本太郎の「森の撃」「太陽の塔」などの作品から、その特徴と太郎の考え方につける。 「太陽の塔」の後に描かれたものは何か
4	◆岡本太郎の「明日の神話」を見て、何が起こっている様子か、そう感じる理由を述べ合う。 どのような出来事が起こっているだろうか ◆「明日の神話」について、作品中央の「ガイコツ」が、「被害者」か「加害者」かについて、色や形、構成に注目して意見を述べ合う。 ガイコツは何者か (○) ◆「明日の神話」と「太陽の塔」の共通点を探り、時の流れや人間の強さという作品のテーマにせまる。 「明日の神話」と「太陽の塔」の共通点は何か (☆)

● 実際の授業では

涙がある方がよい

涙がないと、つらいという感情が伝わってこない。驚いているか、何も考えていない人のように見える。

涙がない方がよい

涙がないことで無我夢中で逃げている感じがある。悲しいとかつらいよりもっとひどいことだと伝わってくる。

どちらがいいか分からぬけど、涙があると時が流れているとわかる。涙がないと、時が止まっているように感じる。

ピカソの制作過程の前半と比較している→

ピカソは直接的に表すものをはじめは描いていたのに消している。誰が見ても分かるようには描かないようになっていたのでは?

形や色の効果を考えている→

赤色の涙があると、アクセントになってその涙に注目してしまう。涙だけ、悲しみだけに注目して欲しいとは思わないでの涙はない方がよい。

涙から受ける印象について、いくつかの視点から感じたことを述べたり、作者がどんなねらいをもって作品を描いたかについて考えられていた。

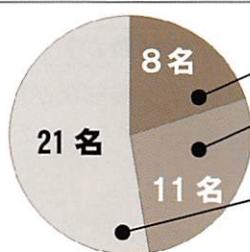
この絵は大塚国際美術館で見たことがあった。本当の大きさで見ると多くの苦しみが一気に押し寄せてこちらまで苦しくなる。何を表現し、何を伝えたいのかは考えたことがなかった。考えてもはじめは、悲しみ、苦しみ、怒りなどしか思いつかなかった。しかし、皆の考え、想像を集めるととても深くなかった。その分感じる苦しみ悲しみ、絶望も深く大きなものとなつた。

● 何ができるようになったか

【ゲルニカの鑑賞をして 生徒の振り返り】

(1) 鑑賞テストより

鑑賞の授業を通して、「美術作品を見てどのような感想をもつか、何に注目するか」がどのように変化をするかについてテストを行い、その変化を見た。単元の鑑賞授業を行う前は、抽象的な作品から見つけたものをそまま答えることが多かった。授業後は作品の雰囲気を自分なりに捉えたり、何が描かれているかを考えたりする者が増えている。



- A 変化なし 2回とも見つけたものをそのまま答えている。
B 変化なし 2回とも作品の雰囲気を捉えたり、何が描かれているか考えたりしている。
C 変化あり 授業後のテストにおいて作品の雰囲気を捉えたり、何が描かれているか考えるようになった。

【授業前と授業後の鑑賞のテストで答え方に変化はあったか (40名中)】

(2) 振り返り文より

単元の終わりに「美術は誰のためのもの?」について考えた。下線部_____は、「授業前に美術作品とはどのようなものだと思っていたか、それが鑑賞を通してどのように変わったか」、下線部_____は、「他の意見を聞いて作品の見方が深まったことへの気づき」が書かれている。

美術館に行く人って、何のために行くのだろう。行ってどこが面白いのかなと思っていて、美術作品に興味がなかったし、ただの絵だと思っていました。でも、ピカソや岡本太郎の作品を鑑賞して、絵に描かれているものには1つ1つ意味があって作者の気持ちや願いなどが込められていることが分かりました。でも、明日の神話を鑑賞して、がいこつは何者かということを話し合ったとき、人それぞれに感じ方に違いがあったから、他の人の意見を聞きながら絵を楽しむということが本当の鑑賞ということかなと思いました。だから、美術は自分の願いなどを見て欲しいという作者、そして鑑賞する人のためのものだと思います。

【テーマ「美術は誰のためのもの?」生徒の振り返り】

保健体育 題材「器械運動（マット運動）」1年

全員が対話できる問い合わせ

「倒立前転をするためには、背屈と腹屈のどちらが必要か？」

この問いは、「倒立前転ができるポイント」を間接的に問うている。また、生徒は技ができる・できないにかかわらず、「背屈」「腹屈」のいずれかの立場をとれる。そして、それを探究する過程で、「できるポイント」について、次の局面が検討される。

- ①倒立姿勢で直立している局面
- ②倒立姿勢から下半身が頭越しする局面
- ③後頭部から順次接触している局面

各局面で、どちらが必要かを検討するためには、動きや映像を根拠にして話し合う活動が不可欠となる。課題追究の過程で、「対話は必然的に生じる」と考えている。

単元構成

時間	◆学習内容と問い合わせ (○) は全員が対話に参加できる問い合わせ、(☆) は学びをさらに深める問い合わせ
1	◆準備運動となる基本動作、特に「おおきなゆりかご」の動きを知る。
2	◆基本技のポイントやコツを理解し、技をより美しくしようと取り組むことができる。 (開脚前転の) 開脚のタイミングは、何時が正しいか (10時か12時か14時か)
3・4	◆技能の確認 (後方への順次接触、着手の仕方、下肢の開くタイミングなど) 後転をまっすぐ、大きくするためには (開脚後転の) 開脚のタイミングは、何時が正しいか (10時か12時か14時か)
5・6・7	◆技能の確認 (支持できる着手、下肢の振り上げ、あごの動かし方、頭からの順次接触など) 倒立前転をするためには、背屈と腹屈のどちらが必要か
8・9	◆スムーズな連続技を目指して演技を発表する。 ◆仲間の演技を認め合い、良い所や生かしたい所を見つける。

マット運動に関する事前の意識調査を実施した結果、マット運動が「好き」「やや好き」と回答した生徒は全体の 66%、「嫌い」「やや嫌い」と解答した生徒は全体の 34%であった。また、高橋(1994)が作成した「体育の診断的・総括的授業評価」を用い、体育授業への意識調査を実施し、結果は表 1 の通りであった。全体として愛好的な態度で臨めているが、技能に自信のない生徒が多く、「技能（運動目標）」が 5 段階の 3 と低い。特に「私は、運動が上手にできるほうだと思います」の質問では、5 段階の 1 を示しており、成功体験や達成感を味わわせる体験を多くさせることで、少しずつ自信を持たせていく必要があると考えた。そこで実態から、準備運動に前転や後転の類似運動として「ゆりかご」を設定し、順次接触や着手への気づきを促した。そこから、「大きなゆりかご」につなげ、背支持から腰の角度の大きな回転へ気づきを促した。生徒全員が安心して取り組める技からはじめ、成功体験を保障することを意識して単元を構成した。また、運動を苦手な生徒を配慮した共同体づくりを意図し、教師が体育授業への愛好的な態度、技能面、運動有能感、人間関係などから総合的

に判断し、編成を行う。生徒同士の主体的な活動やかかわりをねらい、iPad やワークシートを活用した。

● 何ができるようになったか

(1) 単元前後における診断的・総括的授業評価の変化（表1）

	楽しさ15点 (情意目標)	学び方15点 (認識目標)	技能15点 (運動目標)	協力15点 (社会的行動目標)	全体60点
単元前	13.38(4)	12.58(5)	10.93(3)	14.90(5)	51.78(5)
単元後	14.05(5)	13.23(5)	11.55(4)	14.90(5)	53.72(5)
差	0.67	0.65	0.62	0	1.94

表1より、「情意目標」が0.67点、「学び方」が0.65点、「運動目標」が0.62点と向上し、学級全体として1.94点向上がみられた。本単元を通して、生徒は体育授業への愛好的な意識が向上したと捉えられる。

(2) 単元最後の発表会における倒立前転への取り組み結果（表2）

	技能の視点	人数(n=39)	割合
①	大きな前転ができる。	9名	25%
②	補助してもらい、倒立前転ができる。	14名	35.8%
③	背屈した倒立から、腹屈し、倒立前転が一人ができる。	12名	30.7%
④	一人で背屈した倒立て3秒程度静止し、なめらかに前転ができる。	4名	10.2%

単元前の事前調査を行っていないため、単元での変化が見とれなかった。今後の課題とする。

(3) 単元前後における運動有能感の変化（表3）

項目	群	人数	単元前	単元後	差異
			平均値	平均値	
身体的有能さの認知	全体	40	10.13	10.05	-0.08
	上位群	26	12.04	11.54	-0.5
	下位群	14	6.57	7.29	0.72
統制感	全体	40	16.93	16.88	-0.05
	上位群	26	18.31	18.62	0.31
	下位群	14	14.36	13.64	-0.72
受容感	全体	40	16.2	17.28	1.08
	上位群	26	17.19	16.2	-0.99
	下位群	14	14.36	16.29	1.93
運動有能感合計	全体	40	43.25	44.2	0.95
	上位群	26	47.54	47.96	0.42
	下位群	14	35.29	37.21	1.92

体育の診断的授業評価の得点で上位群と下位群にわけ、分析を行った。今回意識した運動を苦手な生徒の数値に向上が見られた。一方、全体や得意とする生徒の数値に低下が見られた。

(4) 単元後の生徒の振り返り（表4）

	振り返りを見とる視点	人数(n=40)
①	学習した技のポイントやコツなど、教科の言葉で語っている。	39名
②	時間軸（過去ー現在ー未来）を意識し、新たな自己や仲間を語っている。	24名
③	他者とのかかわりを踏まえ、自己の中に新たな気づきや課題を語っている。	38名
④	学習したことと様々な経験を関係づけ、豊かなスポーツライフへの意欲や実現へつながるように語っている。	4名